

TOEFL-ITPとSILL及び英検CAN-DO Listsを用いた 英語学力と学習ストラテジー及び学習意識から見た 一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究 (2013)

A Cross-Sectional Study on the Differences Between General Students and
Returnees in Terms of English Proficiency and Learning Strategies and
Consciousness of Learning Using the TOEFL-ITP, the SILL and
the EIKEN CAN-DO Lists
(2013)

木村松雄

Matsuo KIMURA

遠藤健治

Kenji ENDO

I. 研究目的

近年多様化の一途にある学生の背景と英語学力、学習意識、用いる学習ストラテジーの関係を入学前に海外生活体験をもつ帰国生と海外生活体験をもたない一般学生の相違点に着目し、これを客観的に捉える。これにより、教育改革の中で今後ますます重視されるコミュニケーション能力の育成を通じた生涯学習の源となる「自己教育力」の育成に繋がる大学及び、小学校、中学校、高等学校の英語教育の改善への道を探る。本研究の根底には、学習意識が学習ストラテジーを規定し、その結果が英語学力に影響を及ぼすであろうという仮説があり、海外生活体験をもつ帰国学生と海外生活体験をもたない一般学生との間に如何なる相違が存在するかを探るものである。どのような意識が、どのようなストラテジー使用を促し、その結果どのような特徴をもった学力を形成するかに最大の関心がある。最終的な目標は、日本で育つ学習ストラテジーと海外生活（異文化）体験をしないと育ちにくい学習ストラテジーの相違を明らかにすることとその教育的応用である。

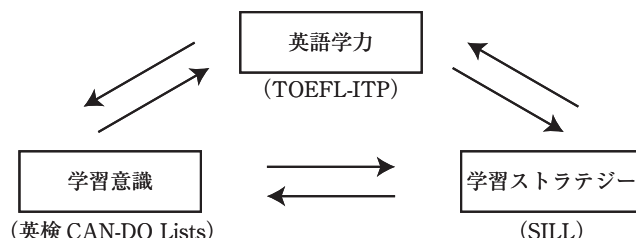


図 1

II. 研究の意義

直接的には、特定の学習集団（入学直後の英米文学科1年生）の英語学力（TOEFL-ITP）、学習背景、学習意識（英検 CAN-DO Lists: 準1級（短大終了時）+ 1級（大学4年生終了時）、用いる学習ストラテジー（SILL: The Strategy Inventory for Language Learning（1990））の相互の関係の把握にある。間接的には、得られた研究成果が、学内外における今後の学習者を中心とした英語教育開発への示唆に、さらには、教育改革下にある小学校、中学校、高等学校、海外の日本人学校、とりわけ、一貫性を制度とした英語教育構想を持っている全国の小中一貫校、中高一貫校、小中高一貫校へは、国際化、グローバル化の中にあつてますますその数を増やしつつある異なる文化背景をもつ学習者の環境と発達に視点をのこした新たな英語教育理念、教育方針、そして真に自立した学習者を育成するための一貫制英語教育を構想する際の示唆となり得る点にあると考える。因みに、文部科学省の基本プランには中高一貫校を500校建設する計画があつた。また2013年10月現在の全国公立の小中一貫校の数は東京都の18校を筆頭に100校に上つている（朝日新聞・10月24日）。また文部科学省は、英語学力向上のため、小学校英語の開始時期を現行の5年生から3年生に早める方針を決定した。正式教科ではない現状（「外国語活動」）を改めて、5、6年生は「教科」とし、授業時間数も週1コマから3コマに増やすという。また学習の開始を現行の5年生から3、4年生に早める方針であるという。教科化することで検定教科書が無償配布し、現在行われていない成績評価は数値化することになる。実現のためには、授業時数の確保、教員の確保、専任教員の養成と免許法の改正（初等英語教員免許（仮））の創設）等が大きな課題となる。明治以降中学校から開始されてきた日本の英語教育が小学校から始まるわけであり、小中の接続、中高の接続がこれまで以上に重要になる。一方でグローバル化の中で背景の異なる学習者の増加は今後一層顕著になってゆくことが想定され、小中高を一貫した一貫制英語教育構想を実現するためには、大学での高等教育における英語教育の姿を想定した国際的に通用する各段階での到達度の設定が必要になってくるであろう。肝心なのは、それらのものが系統性をもって学習者中心にならなければ本来的な外国語学習理

論の構築は難しく、競争原理から協調原理への移行は起こりにくいであろう。グローバル化の中、異なる背景をもつ学習者の環境と発達に視点をおいた本研究の存在意義が問われるところである。

III. 第2言語習得研究における学習ストラテジーの位置

Faerch & Kasper (1983) においては、第2言語習得を目指す学習者には2種類の知識があるという。即ち、「宣言的知識 (Declarative Knowledge)」と「手続き的知識 (Procedural Knowledge)」である。「宣言的知識」は、「知る・理解する知識」で、内在化して自分のものにした第2言語のルールと記憶された言語のチャンクからなる知識であり、説明の対象となる。これに対して「手続き的知識」は、「使う知識」で、第2言語の習得や使用のために、第2言語のデータを処理する際に用いるストラテジーやその手順などについての知識である。因みに筆者はスキーに関しては、「宣言的知識」はあるが「手続き的知識」はなく、自転車に関しては、「手続き的知識」はあるが、「宣言的知識」はない。幼少期に自然環境で外国語を習得した場合、「手続き的知識」は身につけても、「宣言的知識」を身につける可能性は低いと言えよう。反対に、日本のこれまで行ってきたような学習・研究の対象としての英語教育は、「宣言的知識」は身につけても、コミュニケーション能力に繋がるような「手続き的知識」を身に付ける可能性は低いと言えよう。外国語である英語をコミュニケーションの伝達手段にするためには、「宣言的知識」のみならず「手続き的知識」が不可欠であることを確認しておきたい。さて、「手続き的知識」は、さらに、「社会プロセス (Social Process)」と「認知プロセス (Cognitive Process)」に枝別れする。「社会プロセス」は、相互交渉の機会を処理する際に、学習者が使用する様々な行動的なストラテジーからなるプロセスを意味する。「認知プロセス」は、学習者が第2言語のルールを蓄積したり内在化したりするなどの精神的なプロセスを意味する。さらに、「認知プロセス」は、「学習プロセス (Learning Process)」と「使用プロセス (Using Process)」に分かれる。「学習プロセス」において、学習者は、現在の知識と新たなインプットを用いて、新しい第2言語のルールを自動化する。「使用プロセス」は、さらに「産出・受容ストラテジー (Production/Reception Strategies)」と「コミュニケーション・ストラテジー (Communication Strategies)」2分化する。「産出・受容ストラテジー」(Tarone:1981)は、学習者が現在もっている第2言語の知識を有効かつ最小限の努力によって使用する時に用いるストラテジーを指す。これに対して「コミュニケーション・ストラテジー」は、コミュニケーションを持続・継続しようとする時に用いるストラテジーであり、補償的な働きをするものであることから、時として「補償ストラテジー (Compensation Strategies)」を意味することもある。

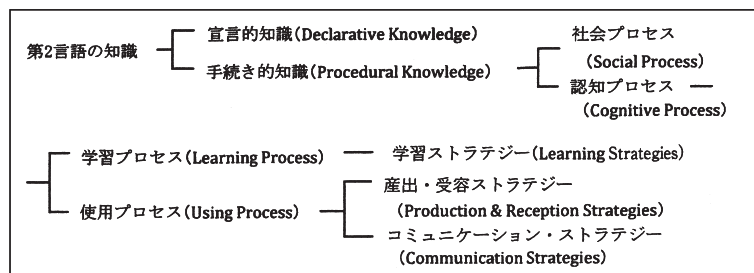


図2

さて、学習プロセスを司る「学習戦略」は、総じて、学習者がどのようにして第2言語の知識を蓄積し、さらに蓄積した知識を、どのようにして自動化するかに関わる法則と考えられる。よって、「学習戦略」は、使用プロセスを司る「コミュニケーション・戦略」や「産出・受容戦略」とは対照的な存在と言えよう。端的に言えば、「学習戦略」は、第2言語を学習し獲得するための戦略であり、一方、「コミュニケーション・戦略」や「産出・受容戦略」は、第2言語を使用するために用いる戦略であると言えよう。因みに「学習戦略」は心理学に基礎を置き、「コミュニケーション・戦略」はコミュニケーション学に基礎を置いている。どちらも認知プロセスを形成する重要なプロセスであるが、言語のもつ概念やルールを記憶したり、一般化したりすることは、およそ全て「学習戦略」によって行われるため、教授・学習レベルにおいては、まず「学習戦略」の習得及び開発が重要な課題であると言えよう。基本的な「コミュニケーション・戦略」は、学習内容に含まれるタスク(課題)の設定によって対応可能と考えられる。因みにこれまでの本研究の成果として、Successful Learners(学習に成功する学習者)が目的に応じて使用する「メタ認知戦略(Metacognitive Strategies)」を英米文学科の学生は海外生活経験の有無に拘らずよく使用することと、さらに英語力が高度化し自動化の域に達したと考えられる学習者の多くは、意識的な学習方法は概して採らず、その結果使用する学習戦略の数も少なくなることが判明している。大学教養課程においても、あるいは、後期中等教育課程においても、EGP(English for General Purposes)からESP(English for Specific/Special Purposes)への比重移動の必要性が出てきていると考えられる。

IV. 研究方法

分析対象は、2013年度に入学した英米文学科学生のうち、下記測度への回答が得られた

277名（男性 61 名、女性 216 名）。海外生活経験については、その期間が 0 ヶ月を「なし群」、1 ～ 23 ヶ月を「短期群」、24 ヶ月以上を「長期群」とすると、各群の人数は、「なし群」男性 34 名、「なし群」女性 139 名、「短期群」男性 5 名、「短期群」女性 23 名、「長期群」男性 22 名、「長期群」女性 54 名、計「なし群」173 名、「短期群」28 名、「長期群」76 名となっている。なお、単年度のデータでは男性の人数が少なく信頼ある分布を仮定できないため、参考までに過去 3 年間（2011 ～ 2013 年度）のデータを累積して分析した結果を付記する。2011 ～ 2013 年度総合データでは、各群の人数は、「なし群」男性 144 名、「なし群」女性 494 名、「短期群」男性 17 名、「短期群」女性 63 名、「長期群」男性 56 名、「長期群」女性 145 名、計「なし群」638 名、「短期群」80 名、「長期群」201 名、総計 919 名である。

従属変数は、英語学力を測定するものとして TOEFL-ITP を実施し、その 3 つの下位得点 (Listening、Structure、Reading) および得点 (Total) の 4 変量を採った。配点は、Listening 68 点、Structure 68 点、Reading 67 点、Total 677 点 ($((\text{Listening} + \text{Structure} + \text{Reading}) \times 10) \div 3$) である。

英語学習のために使用しているストラテジーを測定するためには、木村・遠藤 (2010;2011;2012) と同様に Oxford(1990) の開発した SILL の日本語版を一部変更して実施した。評定は「全く違う」～「全くその通り」の 5 段階とした。得点としては、全 52 項目の評定値および、記憶ストラテジー、認知ストラテジー、補償ストラテジー、メタ認知ストラテジー、情意ストラテジー、社会的ストラテジーの 6 つの方略カテゴリーについてそれぞれ平均評定値を求め、これらを測度とする。

大学入学時に「どのような英語技能にどれだけの自信を持っているか」を調査するために、英検 CAN-DO list 42 項目を用いた。評定は、ストラテジーと同様に「全く違う」～「全くその通り」の 5 段階とした。

以上の測定は、年度初頭に履修手続きの一環として行われた。

V. 結果と考察

1. 英語学力について

まず、全体 277 名の結果の基礎統計量を求めると、Listening では最低点 34、最高点 66、平均値 49.61、標準偏差 6.43、歪度 0.65、尖度 -0.278、Structure では最低点 31、最高点 68、平均値 48.19、標準偏差 6.87、歪度 0.55、尖度 0.36、Reading では最低点 31、最高点 65、平均値 47.88、標準偏差 5.82、歪度 -0.09、尖度 0.714、TOTAL では最低点 367、最高点 660、平均値 485.59、標準偏差 55.96、歪度 0.68、尖度 0.12 となった。この

得点を2011年度および2012年度と比較すると、Listeningは2011年度よりも2012年度、2013年度の方が得点が有意に高くなっている($F_{(2,925)}=3.893, p<.05$ 、多重比較はTukeyのWSD検定による)。一方、Structure、Reading、Totalでは2011年度～2013年度までの間に有意な得点差は検出されなかった。

海外生活期間と性別によって分割した群ごとに、平均得点を求めると表1が得られる。すべての得点において有意な性差は見られなかった。単年度で見ると男性の人数が少ないために差が検出されにくいので、2011年度～2013年度のデータを総合して同様の分析を行ってみたところ、すべての得点において男性の得点が女性の得点を有意に上回っていた(Listening: $F_{(1,922)}=5.827, p<.05$ / Structure: $F_{(1,922)}=17.503, p<.001$ / Reading: $F_{(1,922)}=12.375, p<.001$ / Total: $F_{(1,922)}=17.412, p<.001$)。海外生活期間に関しては、すべての得点において海外生活期間の効果が顕著に表れており、なし群より短期群の得点が高く、短期群よりも長期群の得点がそれぞれ有意に高くなっている。この傾向は2011年度～2013年度のデータを総合しても同様に見られている(Listening: $F_{(2,922)}=381.093, p<.001$ / Structure: $F_{(2,922)}=126.556, p<.001$ / Reading: $F_{(2,922)}=58.2345, p<.001$ / Total: $F_{(2,922)}=231.248, p<.001$)。海外生活期間が長いほど、英語を使用する(使用せざるを得ない)機会が多いため、当然の帰結として英語学力が獲得されたものと考えられる。

表1.TOEFLの結果の基礎統計量と有意差検定

対象		Listening		Structure		Reading		Total	
性別	海外生活経	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
男性	なし群	47.1	4.92	47.2	5.37	48.7	4.60	476.8	41.30
	短期群	47.8	2.59	46.6	7.23	43.8	9.26	460.6	45.89
	長期群	59.2	4.97	56.1	6.77	52.5	6.06	559.5	52.20
	総和	51.5	7.51	50.4	7.37	49.7	6.05	505.3	61.11
女性	なし群	45.9	3.71	44.9	4.94	45.5	4.84	454.6	35.13
	短期群	50.6	5.09	49.3	4.98	49.7	5.22	498.4	44.57
	長期群	56.5	4.07	53.6	6.78	51.2	5.61	537.8	47.14
	総和	49.1	6.00	47.6	6.61	47.4	5.66	480.0	53.26
総和	なし群	46.2	3.99	45.4	5.09	46.1	4.95	458.9	37.36
	短期群	50.1	4.83	48.8	5.39	48.6	6.33	491.6	46.34
	長期群	57.3	4.49	54.4	6.83	51.6	5.73	544.1	49.30
	総和	49.6	6.43	48.2	6.87	47.9	5.82	485.6	55.96
性別の主効果 (df1=1, df2=271)		性差なし F=0.162, n.s.		性差なし F=0.427, n.s.		性差なし F=0.169, n.s.		性差なし F=0.065, n.s.	
海外生活期間の主効果 (df1=2, df2=271)		なし<短期<長期 F=148.500, p<.001		なし<短期<長期 F=49.864, p<.001		なし<短期<長期 F=17.869, p<.001		なし<短期<長期 F=82.913, p<.001	

2. ストラテジーの使用について

2-1. 基礎統計量

ストラテジーについては、各回答の「全く違う」を1点～「全くその通り」を5点と得

点化した。全体の基礎統計量を表 2 に示す。

平均値が 4.00 を越え、英米文学科合格者が高い頻度で実行してきたと見なされる方略項目として「50. 自分の英語学習において、音読は重要だと思う (4.41)」「29. 英語の単語が思いつかないとき、同じ意味を持つ語や句を使う (4.41)」「32. 他の人が英語を使っているときは、集中して聞く (4.21)」「10. 新語は数回書いたり言ったりする (4.21)」「43. 英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらるか、もう一度言ってもらるかたのむ (4.15)」「31. 自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する (4.14)」「25. 英語での会話中、適切な語が思いつかないとき、ジェスチャーを使う (4.09)」「24. 知らない語を理解しようと推測する (4.08)」「11. 英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける (4.04)」「33. 優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける (4.02)」があげられる。しかしこれらの項目の多くは[平均値+標準偏差]の値が 5.00 を越え歪度・尖度も高く、とりわけ項目 50、29、10 は中央値、最頻値共に 5 であり極めて偏った分布をしている。全体の 4～6 割程度が「まったくその通り」と回答しており、学習方略における個人差を反映しにくい項目群である。逆に、「26. 英語で適切な語が分からないとき、自分で新語を作る (2.32)」「7. 新語を身体で表現して覚える (2.24)」は多くの学生がそのようなことをしない方略で、これも個人差を反映しない項目である。また、「23. 読んだり聞いたりしたことを英語で要約する (2.61)」「47. 英語で質問をよくする (2.59)」「45. 他の人と英語を使う練習をよくする (2.51)」も使用頻度の低い項目としてあげられるが、これらは実際に英語を使用することによって英語力を獲得する方略だが、その頻度が低いと言うことは、英米文学科への進学希望者であっても、日常生活では英語を使用する習慣に乏しいことが推測される。

表 2.SILL の回答結果

項目	平均値	標準偏差	中央値	最頻値	歪度	尖度
1. 英語ですでに知っていることと新しく学習したこととの関係を考える。	3.61	1.03	4.00	3	-.39	-.21
2. 覚えやすいように文の中で新語を使う。	3.20	1.16	3.00	4	-.05	-1.01
3. 単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける。	3.56	1.19	4.00	4	-.56	-.64
4. 単語が使われる場面を心に描いて新語を覚える。	3.47	1.15	4.00	4	-.39	-.68
5. 新語を覚えるときには韻を使う。	2.84	1.33	3.00	2	.20	-1.11
6. 新語を覚えるときに単語カードなどを使う。	2.89	1.44	3.00	1	.10	-1.32
7. 新語を身体で表現して覚える。	2.24	1.21	2.00	1	.61	-.79
8. 授業の復習をよくする。	3.15	1.04	3.00	3	-.23	-.48
9. 新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく。	3.26	1.31	3.00	4	-.30	-.98
10. 新語は数回書いて言ったりする。	4.21	1.06	5.00	5	-1.35	1.19
11. 英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける。	4.04	1.06	4.00	5	-.89	-.03
12. 英語の発音練習をする。	3.81	1.13	4.00	4 ^a	-.73	-.31
13. 知っている単語をいろいろな文脈で使う。	3.42	1.03	3.00	3	-.20	-.49
14. 積極的に英語で会話を始める。	3.14	1.21	3.00	3	.05	-.95
15. 英語のラジオ・テレビ番組(NHK等)や英語の映画を見る。	3.72	1.22	4.00	5	-.57	-.80
16. 英語で読み物を読むのが楽しい。	3.65	1.03	4.00	4	-.27	-.89
17. 英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く。	2.96	1.32	3.00	2	.17	-1.12
18. 英語を読むとき、まずスキミング(通し読み)をしてから再び前に戻って注意深く読む。	3.22	1.15	3.00	3	-.10	-.84
19. 英語の新語に似た語を日本語の中に探す。	2.88	1.22	3.00	3	.06	-.92
20. 英語の中にパターンを見つけようとする。	3.47	1.13	4.00	4	-.35	-.76
22. 難しい英単語は分解して、意味を知ろうとする。	3.67	1.14	4.00	4	-.66	-.43
22. 逐語訳(一語一語訳す)はしないよう心掛ける。	3.81	1.03	4.00	5	-.45	-.63
23. 読んだり聞いたりしたことを英語で要約する。	2.61	1.14	2.00	2	.42	-.55
24. 知らない語を理解しようと推測する。	4.08	0.88	4.00	4	-.99	1.11
25. 英語での会話中、適切な語が思い浮かばないとき、ジェスチャーを使う。	4.09	1.06	4.00	5	-1.31	1.39
26. 英語で適切な語が分からないとき、自分で新語を作る。	2.32	1.28	2.00	1	.65	-.66
27. 英語を読むとき、一語一語辞書で調べない。	3.68	1.18	4.00	4	-.57	-.63
28. 他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと心掛ける。	2.99	1.20	3.00	3	.02	-.94
29. 英語の単語が思い浮かばないとき、同じ意味を持つ語や句を使う。	4.41	0.80	5.00	5	-1.48	2.30
30. いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける。	3.57	1.06	4.00	3	-.28	-.51
31. 自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する。	4.14	0.85	4.00	4	-.81	.22
32. 他の人が英語を使っているときは、集中して聞く。	4.21	0.85	4.00	5	-.99	.82
33. 優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける。	4.02	0.94	4.00	4	-.73	.05
34. スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる。	3.37	1.08	3.00	4	-.30	-.51
35. 英語で話しかけることのできる人を探すよう心掛ける。	3.36	1.20	3.00	3	-.21	-.79
36. できるだけ英語で読む機会を探す。	3.72	0.99	4.00	4	-.40	-.65
37. 英語の技能を高めるための明確な目標を持っている。	3.82	1.04	4.00	4	-.53	-.47
38. 自分の英語学習の進歩について考える。	3.94	0.89	4.00	4	-.50	-.23
39. 英語を使うのに自信がないときは、いつもリラックスするよう心掛ける。	3.05	1.07	3.00	3	.07	-.59
40. 間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける。	3.44	1.15	3.00	3	-.18	-.90
41. うまくいったとき、自分をほめる。	3.33	1.24	3.00	3	-.23	-.95
42. 英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく。	3.01	1.32	3.00	3	-.06	-1.11
43. 英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらうか、もう一度言ってもらったかたのむ。	4.15	0.94	4.00	5	-1.19	1.25
44. 話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう。	3.15	1.23	3.00	3	-.09	-.96
45. 他の人と英語を使う練習をよくする。	2.51	1.20	2.00	2	.62	-.44
46. 困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める。	2.99	1.34	3.00	3	.04	-1.15
47. 英語で質問をよくする。	2.59	1.20	2.00	2	.42	-.77
48. 英語話者の文化を学ぶよう心掛ける。	3.80	1.06	4.00	4	-.64	-.29
49. 特定の日本人の英語の熟達者を意識している。	3.13	1.34	3.00	3	-.10	-1.17
50. 自分の英語学習において、音読は重要だと思う。	4.41	0.88	5.00	5	-1.56	2.08
51. 辞書をよく引く。	3.71	1.13	4.00	5	-.54	-.59
52. 自分で考えた英語ノートを活用する。	2.76	1.24	3.00	2	.22	-.96
記憶ストラテジー	3.14	0.60			-.14	-.02
認知ストラテジー	3.47	0.57			.15	-.05
補償ストラテジー	3.60	0.63			-.20	-.10
メタ認知ストラテジー	3.79	0.66			-.21	-.59
情意ストラテジー	3.20	0.70			-.10	-.20
社会ストラテジー	3.20	0.80			.09	-.55

6つの方略カテゴリーの得点では、メタ認知ストラテジー(3.79)、補償ストラテジー(3.60)、認知ストラテジー(3.47)、情意ストラテジー(3.20)、社会ストラテジー(3.20)、記憶ストラテジー(3.14)となり、この順番は2011年度、2012年度と同様であった(2011～

2013 年度を総合するとメタ認知ストラテジー (3.75)、補償ストラテジー (3.59)、認知ストラテジー (3.44)、情意ストラテジー (3.22)、社会ストラテジー (3.18)、記憶ストラテジー (3.10) となった)。ここでも、他者との間で英語を使ってコミュニケーションをはかる社会的ストラテジーよりも、「理解」や「心がけ」が重視されている。日本人学習者の特徴といえるかもしれない。

2-2. 海外生活経験とストラテジーの使用

各ストラテジーの評定値に関し、海外生活経験の期間（「なし群」、「短期群」、「長期群」）×性別（男性、女性）の 2 要因分散分析を行ったところ（各平均値、 F 値、 p 値は付表 1 に示す）、海外生活期間の主効果が 52 項目中 25 項目で認められた。WSD 検定により多重比較を行った結果、群間の相違が明らかなものをあげると、まず、①「長期群」もしくは「長期群」と「短期群」の両群が、「なし群」よりも多く使用する項目として「11. 英語のネイティヴ・スピーカーのように話すよう心掛ける」「13. 知っている単語をいろいろな文脈で使う」「14. 積極的に英語で会話を始める」「15. 英語のラジオ・テレビ番組 (NHK 等) や英語の映画を見る」「17. 英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く」「2. 覚えやすいように文の中で新語を使う」「23. 読んだり聞いたりしたことを英語で要約する」「26. 英語で適切な語が分からないとき、自分で新語を作る」「27. 英語を読むとき、一語一語辞書で調べない」「28. 他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと心掛ける」「40. 間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける」「44. 話しているとき、英語のネイティヴ・スピーカーに間違いを直してもらう」「45. 他の人と英語を使う練習をよくする」「46. 困ったとき、英語のネイティヴ・スピーカーからの助けを求める」「47. 英語で質問をよくする」「7. 新語を身体で表現して覚える」の 16 項目があげられる。英語を生活の中で積極的に使用する方略群であるが、海外生活が「英語を使う」ことを促進している様子がうかがえる。2012 年度では「長期群」が多用する項目は 4 項目しかあげられなかったのも、やや傾向の異なる結果であった。②逆に、「長期群」が最も使用しない項目としては「34. スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる」「42. 英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく」「50. 自分の英語学習において、音読は重要だと思う」「51. 辞書をよく引く」の 4 項目があげられる。机の前に座って勉強することに関わる態度である。極端に言うならば、「長期群」は机の前に座らなくても英語に接しているのに対して、「なし群」は机の前でしか英語に接していないのであろう。③「短期群」の使用程度がもっとも高い項目として「35. 英語で話しかけることのできる人を探すよう心掛ける」と「36. できるだけ英語で読む機会を探す」があげられる。「短期群」は「なし群」よりも、英語を使用する場面を意識的に捉えようとするが、「長期群」になると、そのような場面は日常化するためにそのような方略を意識的にすることは減少するのであろう。2012 年度で

はこれらの項目が多数であったが、今回は2項目に留まっている。2011～2013年度を総合して上記と同様の分析を行うと、①「長期群」もしくは「長期群」と「短期群」の両群が、「なし群」よりも多く使用する項目として、「2. 覚えやすいように文の中で新語を使う」「7. 新語を身体で表現して覚える」「11. 英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける」「13. 知っている単語をいろいろな文脈で使う」「14. 積極的に英語で会話を始める」「15. 英語のラジオ・テレビ番組(NHK等)や英語の映画を見る」「16. 英語で読み物を読むのが楽しい」「17. 英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く」「22. 逐語訳(一語一語訳す)はしないよう心掛ける」「23. 読んだり聞いたりしたことを英語で要約する」「27. 英語を読むとき、一語一語辞書で調べない」「28. 他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと心掛ける」「35. 英語で話しかけることのできる人を探すよう心掛ける」「40. 間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける」「45. 他の人と英語を使う練習をよくする」「46. 困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める」「47. 英語で質問をよくする」と、やはり英語を積極的に実践しようとする方略が多数並んでいる。②逆に、「長期群」が最も使用しない項目としては「8. 授業の復習をよくする」「12. 英語の発音練習をする」「20. 英語の中にパターンを見つけようとする」「32. 他の人が英語を使っているときは、集中して聞く」「33. 優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける」「34. スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる」「38. 自分の英語学習の進歩について考える」「42. 英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく」「50. 自分の英語学習において、音読は重要だと思う」「51. 辞書をよく引く」「52. 自分で考えた英語ノートを活用する」などの英語を勉強しようという学習態度の項目があげられる。①と②とでは、主体における英語の位置づけ、意味づけが全く異なっている。③「短期群」がもっとも多用するものとしては「1. 英語ですでに知っていることと新しく学習したこととの関係を考える」「26. 英語で適切な語が分からないとき、自分で新語を作る」「30. いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける」「36. できるだけ英語で読む機会を探す」「43. 英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらるか、もう一度言ってもらるかたのむ」「44. 話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう」があげられる。英語圏での生活経験が中途半端な長さのために、意識的に英語に接近しようとする態度であろう。日本語圏内では、そのような行動の必然性はなく、生活経験が長期になれば、対人場面での英語使用が当たり前のものとなるので、そのような態度はとりたてて意識することが少なくなると推測される。

カテゴリーでは認知ストラテジー(「なし群」<「長期群」)と補償ストラテジー(「短期群」<「長期群」)、社会的ストラテジー(「なし群」<「短期群」,「長期群」)において海外生活経験の主効果が有意であった。概して「長期群」の使用頻度が高い。2011～2013年度を総合すると、認知ストラテジー(「なし群」<「短期群」,「長期群」)、補償ストラテジー

(「なし群」<「短期群」、「長期群」)、補償ストラテジー(「なし群」、「長期群」<「短期群」)、社会的ストラテジー(「なし群」<「短期群」、「長期群」)において海外生活経験の主効果が有意であり、補償ストラテジーでやや異なる傾向が見られる。

性別の主効果は3項目で検出され、「6. 新語を覚えるときに単語カードなどを使う」と「8. 授業の復習をよくする」において女性の方が男性より使用しており、「20. 英語の中にパターンを見つけようとする」においては男性の方が女性よりも使用していた。カテゴリでは有意な性別の主効果は得られなかった。概して、性別によるカテゴリ使用の頻度には顕著な違いは見られない。性別についても2011～2013年度を総合すると、上記よりも解釈しやすい項目群が検出された。まず女性が男性よりも有意に多く使用する方略として「43. 英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらうか、もう一度言ってもらうか」「44. 話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう」「46. 困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める」「48. 英語話者の文化を学ぶよう心掛ける」「50. 自分の英語学習において、音読は重要だと思う」があげられる。対人的な交渉に関する方略が中心である。それに対して男性が女性より多く使用する方略は「13. 知っている単語をいろいろな文脈で使う」「19. 英語の新語に似た語を日本語の中に探す」「20. 英語の中にパターンを見つけようとする」などで、明らかに分析的態度である。この「対人」と「分析」という相違は、他の行動面でもしばしば指摘されることで、言語学習においても同様の傾向が見られたのは興味深い。

2-3. ストラテジーの使用と英語学力

方略カテゴリの記憶ストラテジー、認知ストラテジー、補償ストラテジー、メタ認知ストラテジー、情意ストラテジー、社会ストラテジーの各得点と、TOEFL-ITPのListening得点、Structure得点、Reading得点、Total得点との相関係数をもとめた結果、認知ストラテジーと全英語得点との間で有意な相関が認められた(Listeningとの間で $r=.23$ 、 $p<.001$ 、Structureとの間で $r=.17$ 、 $p<.01$ 、Readingとの間で $r=.171$ 、 $p<.01$ 、Totalとの間で $r=.22$ 、 $p<.001$)。また社会ストラテジーとListeningとの間でも有意な相関が得られた($r=.13$ 、 $p<.05$)。相関関係については、年度ごとに異なる結果が得られている。

次に、方略を説明変数、英語得点を従属変数とする重回帰分析を適用した結果を記す。まずListeningを目的変数とした場合、認知、メタ認知、記憶、情意、社会の得点を説明変数として投入したモデルで、 $R=.411$ 、 $p<.001$ となった(自由度調整済み決定係数は.153)。標準化 β 係数は認知(.495)、メタ認知(−.299)、記憶(−.174)、情意(−.168)、社会(.158)で、認知と社会の β 係数は正だが、メタ認知、記憶、情意は負になっている。Structureを目的変数とした場合は、認知とメタ認知を説明変数としたモデルで有意な重相関係数が得られた($R=.274$ 、 $p<.001$)。標準化 β 係数は認知(.354)、メタ認知(−.269)で、ここでも β 係

数は認知で正、メタ認知で負となっている。Reading を目的変数とした場合では、認知と情意を説明変数としたモデルが得られた ($R=.243, p<.001$)。標準化 β 係数は認知 (.257)、情意 (-.188) であった。Total を目的変数とした場合、認知、メタ認知、情意を説明変数としたモデルが有意となった ($R=.340, p<.001$)。標準化 β 係数は認知 (.449)、メタ認知 (-.248)、情意 (-.154) となり、全体としても認知が正、メタ認知と情意が負となっている。英語得点の増加に寄与しない方略もあるということであるが、この4つのモデルは有意な重相関係数は得られたものの寄与率は低いレベルにとどまっているので、6つの方略のカテゴリーの得点が説明変数として適当かも疑問視される。

前節で、海外生活経験の長い者が最も使用する方略群と、最も使用しない方略群が識別された。そこで個人ごとに、前者に属する項目の平均値を求め能動的英語実践態度得点、後者に属する項目の平均値を求め勉強的英語学習態度得点とし、英語得点との相関を求めた。2013年度のデータでは、能動的英語実践態度得点と Listening との間で $r=.334, p<.001$ 、Structure との間で $r=.213, p<.001$ 、Reading との間で $r=.230, p<.001$ 、Total との間で $r=.295, p<.001$ とすべて有意な正の相関が得られた。勉強的英語学習態度得点とでは、Listening との間で $r=-.289, p<.001$ 、Structure との間で $r=-.172, p<.01$ 、Reading との間で $r=-.143, p<.05$ 、Total との間で $r=-.230, p<.001$ とすべて有意な負の相関が得られた。2011～2013年度の総合データでも、能動的英語実践態度得点と Listening との間で $r=.327, p<.001$ 、Structure との間で $r=.231, p<.001$ 、Reading との間で $r=.219, p<.001$ 、Total との間で $r=.301, p<.001$ とすべて有意な正の相関が得られ、勉強的英語学習態度得点とでは、Listening との間で $r=-.255, p<.001$ 、Structure との間で $r=-.166, p<.001$ 、Reading との間で $r=-.131, p<.001$ 、Total との間で $r=-.215, p<.001$ とすべて有意な負の相関が得られた。能動的に英語を使用しようという方略を用いるほど英語得点は高く、英語をきちんと勉強しようとするほど英語得点は低くなる傾向が得られたわけである。上記と同様に、能動的英語学習態度得点と勉強的英語学習態度得点を説明変数、英語得点を従属変数とする重回帰分析を2011～2013総合データに適用した結果、Listening を目的変数とした場合、 $R=.415, p<.001$ となり、能動的英語学習態度の標準化 β 係数は .351、勉強的英語学習態度の標準化 β 係数は -.301 となった。以下、Structure を目的変数とした場合は、 $R=.307, p<.001$ 、能動的英語学習態度 ($\beta =.255$)、勉強的英語学習態度 ($\beta =-.228$)、Reading を目的変数とした場合では、 $R=.279, p<.001$ 、能動的英語学習態度 ($\beta =.246$)、勉強的英語学習態度 ($\beta =-.188$)、Total を目的変数とした場合、 $R=.387, p<.001$ 、能動的英語学習態度 ($\beta =.329$)、勉強的英語学習態度 ($\beta =-.278$) となり、すべて能動的英語学習態度は正、勉強的英語学習態度は負の係数が得られた。ここでも、勉強しようとするほど逆説的に点数は下がるという予測である。

能動的英語学習態度得点と勉強的英語学習態度得点について、それぞれ 1.00～2.50 を低

使用群、2.51～3.50を中間群、3.51～5.00を高使用群と群構成し、英語得点を従属変数とする分散分析を行った。その結果、能動的英語学習態度を独立変数とした場合は、Listeningでは低<中<高($F_{(2,438)}=14.572, p<.001$)、Structureでは低<中=高($F_{(2,438)}=3.767, p<.05$)、Readingでは低=中<高($F_{(2,438)}=7.531, p<.001$)、Totalでは低<中<高($F_{(2,438)}=12.262, p<.001$)という関係が検出された。一方、勉強的英語学習態度を独立変数とした場合は、どの英語得点についても有意差は得られなかった。2011～2013年度の総合データについて同様の分析を試みたところ、英語学習態度を独立変数とした場合、すべての得点で低<中<高という関係が検出された(Listening; $F_{(2,918)}=47.103, p<.001$ / Structure; $F_{(2,918)}=24.108, p<.001$ / Reading; $F_{(2,918)}=21.768, p<.001$ / Total; $F_{(2,918)}=40.986, p<.001$)。勉強的英語学習態度を独立変数とした場合は逆に、すべての得点で高<中<低という負の関係が得られた(Listening; $F_{(2,918)}=26.679, p<.001$ / Structure; $F_{(2,918)}=15.457, p<.001$ / Reading; $F_{(2,918)}=11.062, p<.001$ / Total; $F_{(2,918)}=22.996, p<.001$)。分散分析によっても上記の傾向を確かめることができた。

3. 英語学習効力感(CAN-DO)について

3-1. 海外生活経験とCAN-DO

CAN-DOの設問に対する回答の「全く違う」を1点～「全くその通り」を5点と得点化し、各項目の平均値を求めた。概して得点は高くなく、4.00を越える項目は皆無であった。最も高い項目でも「56. 公共の施設や学校などで、簡単な指示や説明を聞いて、理解することができる」の3.90、「57. 交通機関における指示や連絡事項を聞いて、理解することができる」の3.80程度で、あまり効力感を感じていない。一方、2.50に満たないような極端に得点の低い項目もなく、総体としては、優れてもいないが、著しく劣っているわけでもないという自覚状態のようである。

各得点に関し、海外生活経験の期間(「なし群」、「短期群」、「長期群」)×性別(男性、女性)の2要因分散分析を行った(各平均値、 F 値、 p 値を付表2に示す)。海外生活期間の主効果は42項目中41目で認められ、そのすべてにおいて長期群の得点が最も高くなっている。2012年度よりも一貫した結果となった。各項目をListening準1級レベル、Listening 1級レベル、Listening Totalと技能とレベルでまとめて得点化した結果でも、全レベルで、「長期群」の得点が有意に高かった。海外生活期間の長いものが最も高い効力感をもっているという結果となったわけだが、これは逆に言えば、CAN-DOの項目が日常で遭遇する状況にどの程度対応できるかを問うものなので、国内で、英語を使う必要のない生活を送っている人が高く自己評価することが難しいことに由来するといえよう。2011～

2013年度総合データでは、全項目で海外生活経験の主効果が有意となり、42項目中27項目で低<中<高、15項目で低<中=高という関係が見いだされた。技能とレベルでまとめた場合も低<中<高という関係が10例、低<中=高という関係が2例で、結論的には一貫して「長期群」の効力感が最も高いといえる。

性別の主効果が有意となった項目は2項目のみで（「65. 自分の専門分野に関する講義や発表などを聞いて、それについて質問したり自分の考えを述べたりすることができる」「71. 社会的な話題や時事問題について、質問したり自分の考えを述べたりすることができる」）、いずれも男性の方が女性よりも高得点になっている。2項目だけなので傾向を概括することができないが、2011～2013年度総合データでは、「60. 社会的な話題に関する話を理解することができる」「62. テレビやラジオの政治・経済的なニュースを理解することができる」「71. 社会的な話題や時事問題について、質問したり自分の考えを述べたりすることができる」「72. 会議に参加してやりとりをすることができる」「76. 英字新聞で社会的な出来事に関する記事を理解することができる」「77. まとまった量の英文の要点を理解することができる」「79. 商品の取り扱い説明書を理解することができる」「90. 社会的な話題について自分の意見をまとまりのある文章で書くことができる」などの項目で男性の方が女性よりも有意に得点が高かった。比較的「社会」に関わりのある項目が並んでいる。これに対して、女性の方が男性よりも得点が高い項目は「87. 日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる」と「88. 自分がやりたいと思っていることの説明や理由を書くことができる」の2項目だけであった。設問によっては、回答に男女の特性や機能が反映される可能性もあるが、一般的には、性別によって英語学習に関わる効力感が大きく影響を受けるとは言えないようである。

3-2.CAN-DO と英語学力

技能とレベルごとの各得点と、TOEFL-ITPのListening得点、Structure得点、Reading得点、Total得点との相関係数をもとめた結果、2013年度データおよび2011～2013年度総合データ双方において、すべてのペアで有意な正の相関が得られた。自覚されている効力感の高さと客観テストの成績の高さに対応関係が認められたわけである。

次に技能とレベルごとの得点を説明変数、TOEFL-ITPのListening得点、Structure得点、Reading得点、Total得点を従属変数としてステップワイズによる重回帰分析を行った。その結果、Listeningでは $R=.533$ 、 $p<.001$ で、モデル式に投入された説明変数はListening Total（標準 β 係数 $=.533$ ）のみであった。Structureでは $R=.435$ 、 $p<.001$ で、モデル式に投入された説明変数はListening Total（ $\beta=.263$ ）とReading準1級（ $\beta=.206$ ）、Readingでは $R=.389$ 、 $p<.001$ で、モデル式に投入された説明変数はListening1級（ $\beta=.389$ ）のみ、Totalでは $R=.504$ 、 $p<.001$ で、モデル式に投入された説明変数は

Listening Total ($\beta = .504$) のみであった。決定係数は .15 ～ .29 と低い水準にとどまり、予測力は高いとは言えないが、いずれの英語得点にも Listening が組み込まれている点が興味深い。日本人学習者にとって、英語ができるという実感は「英語が聞き取れる」ことから得られている可能性が高い。

2011 ～ 2013 年度総合データで同様の分析を試みたところ、Listening では $R = .491$ 、 $p < .001$ で、モデル式に投入された説明変数は Listening Total (標準 β 係数 = .533) と Speaking 準 1 級 ($\beta = .145$) あった。Structure では $R = .396$ 、 $p < .001$ で、モデル式に投入された説明変数は Listening Total ($\beta = .181$) と Reading Total ($\beta = .162$) と Speaking 1 級 ($\beta = .097$)、Reading では $R = .371$ 、 $p < .001$ で、モデル式に投入された説明変数は Listening Total ($\beta = .246$) と Reading 準 1 級 ($\beta = .236$) と Writing 準 1 級 ($\beta = -.105$)、Total では $R = .473$ 、 $p < .001$ で、モデル式に投入された説明変数は Listening Total ($\beta = .363$) と Reading 準 1 級 ($\beta = .148$) であった。分析対象者が増えたために、モデルに投入される説明変数が少し増えているが、Listening Total がすべての英語得点を予測するモデルに組み込まれている点から、2013 年度の結果よりも、Listening の意味づけがより明確になったと言えるだろう。

3-3. ストラテジーと CAN-DO

方略の使用と効力感との関係を見るために、方略カテゴリーの得点と CAN-DO の 12 レベルとの間で相関係数を算出した。その結果、情意ストラテジーと Reading 準 1 級との間で無相関であった以外は、すべての組み合わせで有意な正の相関が得られ ($r = .13$ 、 $p < .05$ ～ $r = .52$ 、 $p < .001$)、2011 ～ 2013 年度総合データにおいても同様であった ($r = .15$ 、 $p < .01$ ～ $r = .47$ 、 $p < .001$)。各方略を使用しているほど効力感も高い傾向がある。

先に英語学習ストラテジーを能動的英語実践態度と勉強的英語学習態度に分けて検討したので、ここでもその 2 つの得点と CAN-DO との相関を求めた。その結果、能動的英語実践態度は、すべての CAN-DO レベルとの間で有意な比較的高い相関 ($r = .52$ ～ $.61$ 、 $p < .001$) が得られたが、勉強的英語学習態度は、Reading 準 1 級 ($r = .15$ 、 $p < .05$)、Reading Total ($r = .14$ 、 $p < .05$)、Writing 準 1 級 ($r = .16$ 、 $p < .01$)、Writing Total ($r = .13$ 、 $p < .05$) との間で有意な相関が見られただけで、他の組み合わせでは無相関であった。勉強的英語学習態度との対応関係は明確とは言えない。

VI. 課題

1. 入学時より英語学力において高い成績を出しているながら伸び悩んでいる上位グループに

属する学生（長期海外生活体験者等：男性：559.5, 女性：537.8）には、国際レベルにおいて言語能力をさらに向上できるようなカリキュラムの開発、専門領域（文学、語学、言語教育、コミュニケーション）との連動、英語を共通語として成り立つ専門科目群の創設等、EGP (English for General Purposes) 教育から脱却し、ESP (English for Specific/Special Purposes) 教育、さらには、EAP (English for Academic Purposes) 教育へ転換していくことが重要であろう。2013年度、将来構想委員会と英語科目検討委員会により提案された英語で行われる科目郡を履修することで卒業要件単位を満たす案（EMI化）の実効性に期待をかけたところである。

2. 1. と同時に、英語習得そのものに自信が持てない（効力感が低い）下位グループに属する学生には、さらに木目細かい学習支援を系統的かつ経年的に行う必要があるかと思う。
3. 大学における英語教育プログラムの中に、レベル別に基礎訓練を終えた学生を一定期間（3か月―6か月）英語使用国（英米加豪のみならずアジア諸国を含む）に留学させ、英語運用能力を高めるのみならず、グローバル化に対応する異文化間理解（＝文化相対主義：文化に優劣はない）の意識を高められるような語学教育システムの構築を真剣に検討する時期に入っていると考え。大学全体がセメスター制導入の実行を具体的に検討している今こそ、英語の習得と専門知識の習得を前提とした英米文学科の学生に相応しい教育システムを準備する必要があると考え。
4. 大学教養課程における到達度目標を CEFR (Common European Framework for Reference of Languages: Learning, Teaching, Assessment) や CEFR を日本の教育環境に合せて策定された CEFR-J 等を参考にして準備する必要がある。上記 1, 2, 3 はこの全体枠の中で処理することになる。CEFR の中核理念は、複言語主義 (plurilingualism) ・複文化主義 (pluriculturalism) 及び行動中心主義にある。行動中心主義は、言語能力を単なる言語知識としてではなく、特定の場面でどのような課題に対処できるかで言語能力を判断する立場で示す。CEFR は、言語教育政策全般を包括的に論じているが、とりわけ世界的に注目を集めているのは、言語熟達度を測定するための共通参照レベル (Common Reference Levels) である。国際化・グローバル化を正面から議論するのであれば、これから行う言語教育を世界レベルで評価できる評価システムを準備しなくてはならないであろう。本研究で用いている日本英語検定協会の英検 CAN-DO Lists も基本的には CEFR に基本理念を置いて作成されている。また 2013 年度より文部科学省の指導により、全国の中学校・高等学校は到達度目標を策定した外国

語（英語）教育を行うことが確定し、各自治体は学習指導要領の理念を具現化した到達度目標の設定を行っている。また II. 研究の意義で触れたように、文部科学省は、英語学力向上のため、小学校英語の開始時期を現行の 5 年生から 3 年生に早め、さらに正式教科ではない現状（「外国語活動」）を改めて、5, 6 年生は「教科」とし、授業時間数も現行週 1 コマから 3 コマに増やす計画であるという。教科化することで、現在行われてはいない成績評価を数値化することになるという。恐らくこの後は、先行している中学校・高等学校の到達度目標に向かう小学校英語教育の到達度目標の策定が行われ、小一・中一・高一を一貫した到達度基準に基づく英語教育が行われ、高等教育機関である大学の英語教育は、それらの成果を受け止めさらに育てるものになっていかなければならず、高等教育課程に相応しい到達度目標の設定が必要になってくることは必定である。大学センター試験の廃止論を受け、大学入試を含め、政府主導で大きな改革案が出されるものと予測されるが、どのような要求が社会からあったとしても十分に答えられるよう、グローバル化を見据えた、大学（学部・学科）としての英語教育到達度を大学の理念との関係から策定しておくことはあらゆるものを優先して重要であると言えよう。

青山学院英語教育研究センターは、全国に先駆け、「青山学院 4－4－4 一貫制英語教育シラバス」を 2002 年に策定し、一貫制英語教育に資する独自の教科書（SEED BOOKS : 全 12 巻（CD 付））の開発に着手し 2014 年度中に全巻を完成する予定である。第 12 巻（高等部 3 年生用）は青山スタンダード教育機構の協力を得て、大学教養課程の講義内容を英語で教授・学習できる CLIL(Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合学習) 的色彩の濃いものになることが確定している。また本年度よりは、グローバル化への対応を鑑み、「青山学院 4－4－4 一貫制英語教育シラバス」の CEFR 化対応の準備を開始している。この後は、入試形態別の有無に拘わらず、行動中心主義に基づく英語教育を受けた中学生・高校生が自らの可能性を果たす場として大学に入学してくるわけである。これからの大学（学部・学科）の英語教育は、彼らの学習経験と培った言語能力を尊重し、EGP (English for General Purposes) の強化のみならず、ESP (English For Specific/Special Purposes) さらには EAP(English for Academic Purposes) に寄与する本来的な外国語教育を行わなければならないと思われる。

最後に「青山学院 4－4－4 一貫制英語教育シラバス」より、「第三期（中等部 3 年生－高等部 3 年生）到達目標（General Objectives）」と「第三期学年別到達目標（Grade Objectives）」の内、高等部 3 年生の到達目標を示す。

第三期英語教育（中等部3年生―高等部3年生）

1. 目的論

[第三期英語教育の目標：Goals]

国際語である英語を学ぶことを通して、より広い視野を身に付け、普遍的なものを追い求める心を養い、広く正解全体に目を向けて、国や文化の違いを超えて社会に貢献できる人間を育てる。

[第三期具体的到達目標：General Objectives]

1. 大学以上のレベルにおいて、英語の専門書を読み、あるいは英語で論文を書き、プレゼンテーションができるようになるための基礎力を養う。
2. 英語でアカデミック、または社会的なトピックについてディスカッションができるようになるための基礎力を養う。
3. 日常的な言語使用の場において、英語を用いて直接コミュニケーションができる基礎力を養う。
4. 「英語コミュニケーション能力テスト」の平均スコア 620 点（TOEFL(PBT) 換算 480 点, TOEIC 換算 530 点）を目指す。[英検 2 級→英検準 1 級]

[高等部3年生到達目標：Grade Objectives]

1. 未知の単語や難解な表現に遭遇しても、既存の知識、スキーマ、コンテキストを利用することによって積極的に概要、要点を理解しようと取り組み、そこから得た情報に基づいて、自分の意見を友達と交換しようとする態度や意欲を持つ。
2. およそ 2000 word items の語彙を使用し、自分の意見を 200 語程度のパラグラフにまとめ、それを口頭で相手に伝え、意見を交換し合うことができる。
3. およそ 3000 word items の語彙で書かれた英文を平均 150WPM のスピードで読んで要点を掴んだり、またおよそ 2000 word items で書かれた英文が 160WPM で読まれるのを聞き、その概要を掴むことができる。
4. 知的発達段階に即した社会的、学術的な英語の文章を読んだり、聞いたりすることを通して、大学での専門教養に入る前に必要な基礎的な教養を身に付けることを目指す。（CLIL, ESP への可能性、高大連携）
5. 「英語コミュニケーション能力テスト」の平均スコア 620 点（TOEFL(PBT) 換算 480 点、TOEIC 換算 530 点）を目指す。[英検 2 級→英検準 1 級]

参考文献

1. O'Malley, J.M. and Chamot, A.U. 1990. Learning Strategies in Second Language Acquisition, C.U.P.
2. Oxford, R. 1989. Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know: New York: Newbury House.
3. Cohen, A.D. and E. Macaro (eds.) 2007. Language Learner Strategies, O.U.P.
4. Griffiths, C. (ed.) 2008. Lessons from Good Language Learners, C.U.P.
5. Council of Europe. 2001. Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment, C.U.P.
6. 木村松雄（編著）、2011年、『新版英語科教育法』、学文社。
7. 矢野安剛・本名信行・木村松雄・木下正義（編著）、2011年、『英語教育学大系第2巻英語教育政策—世界の言語教育政策論をめぐって』、大修館書店。
8. 木村松雄・遠藤健治、2010年3月、青山学院大学文学部「紀要」第51号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2009年）」
9. 木村松雄・遠藤健治、2011年3月、青山学院大学文学部「紀要」第52号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2010年）」
10. 木村松雄・遠藤健治、2012年3月、青山学院大学文学部「紀要」第52号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2011年）」
11. 木村松雄・遠藤健治、2011年1月、「青山スタンダード論集」第7号、「英語熟達度、英語学習方略、英語学習への意識に特化した経年的研究（2010）」
12. 木村松雄・遠藤健治、2012年1月、「青山スタンダード論集」第8号、「TOEFL-ITP, SILL, 検CAN-DO Listsを用いた英語熟達度と言語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究（2012）」

付表 1. 海外生活期間と性別ごとの方略得点

項目	群	男性		女性		期間の主 効果(F値)	性別の主 効果(F値)
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
1.英語ですでに知っていることと新しく学習したこととの関係を考える。	なし群	3.68	1.12	3.60	1.00	.061	.000
	短期群	3.60	1.52	3.70	1.15		
	長期群	3.59	0.91	3.57	1.04		
2.覚えやすいように文の中で新語を使う。	なし群	2.91	1.14	3.00	1.12	9.452***	2.434
	短期群	4.40	0.55	3.48	1.34		
	長期群	3.68	0.99	3.48	1.13		
3.単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける。	なし群	3.65	1.37	3.63	1.07	.284	.812
	短期群	3.80	1.10	3.17	1.30		
	長期群	3.50	1.44	3.52	1.22		
4.単語が使われる場面を心に描いて新語を覚える。	なし群	2.94	1.28	3.55	1.09	3.407*	.110
	短期群	3.60	0.89	3.35	1.34		
	長期群	4.00	1.07	3.43	1.11		
5.新語を覚えるときには顔をを使う。	なし群	2.35	1.37	3.01	1.33	.149	.303
	短期群	3.00	1.41	2.70	1.22		
	長期群	2.73	1.32	2.80	1.29		
6.新語を覚えるときに単語カードなどを使う。	なし群	2.38	1.61	3.01	1.34	.187	4.775*
	短期群	2.00	1.73	3.43	1.41		
	長期群	2.95	1.59	2.72	1.45		
7.新語を身体で表現して覚える。	なし群	1.76	1.18	2.17	1.16	4.938**	.241
	短期群	2.40	1.34	2.43	1.27		
	長期群	2.59	1.18	2.50	1.27		
8.授業の復習をよくする。	なし群	3.09	1.22	3.26	.99	3.033*	9.087**
	短期群	2.60	1.82	3.30	.93		
	長期群	2.32	0.89	3.24	.95		
9.新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく。	なし群	2.76	1.48	3.38	1.26	.469	.298
	短期群	3.60	1.34	3.00	1.41		
	長期群	3.05	1.36	3.44	1.18		
10.新語は数回書いたり言ったりする。	なし群	4.00	1.13	4.40	.88	2.027	2.485
	短期群	3.40	1.52	3.91	1.16		
	長期群	4.05	1.17	4.09	1.20		
11.英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける。	なし群	3.65	1.23	3.96	1.04	6.449**	.459
	短期群	4.60	0.55	3.83	1.27		
	長期群	4.36	0.95	4.41	.86		
12.英語の発音練習をする。	なし群	3.59	1.21	3.93	1.00	.542	2.075
	短期群	4.60	0.55	3.52	1.41		
	長期群	3.86	1.13	3.65	1.29		
13.知っている単語をいろいろな文脈で使う。	なし群	3.15	1.23	3.28	.91	8.440***	3.380
	短期群	4.40	0.89	3.43	1.20		
	長期群	3.91	0.97	3.67	.99		
14.積極的に英語で会話を始める。	なし群	2.62	1.23	2.83	1.14	20.696***	1.287
	短期群	4.40	0.55	3.35	1.07		
	長期群	3.73	1.08	3.81	1.08		
15.英語のラジオ・テレビ番組(NHK等)や英語の映画を見る。	なし群	3.44	1.24	3.44	1.23	10.211***	.573
	短期群	4.40	0.89	3.83	1.15		
	長期群	4.23	1.19	4.28	1.00		
16.英語で読み物を読むのが楽しい。	なし群	3.82	1.09	3.46	.96	.477	.304
	短期群	3.80	1.10	4.00	.90		
	長期群	3.45	1.26	3.94	1.02		
17.英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く。	なし群	2.26	1.31	2.63	1.19	19.658***	3.405
	短期群	2.80	1.64	3.65	1.27		
	長期群	3.59	1.18	3.69	1.18		
18.英語を読むとき、まずスキミング(通し読み)をしてから再び前に戻って注意深く読む。	なし群	3.06	1.52	3.24	1.13	.481	.101
	短期群	3.40	1.52	2.83	1.11		
	長期群	3.23	1.11	3.41	.92		
19.英語の新語に似た語を日本語の中に探す。	なし群	3.09	1.24	2.94	1.22	.813	1.526
	短期群	2.80	1.64	2.43	1.24		
	長期群	3.09	1.31	2.72	1.09		
20.英語の中にパターンを見つけようとする。	なし群	3.94	0.98	3.51	1.06	2.278	7.140**
	短期群	4.00	1.22	3.17	1.15		
	長期群	3.59	1.10	3.11	1.27		
22.難しい英単語は分解して、意味を知ろうとする。	なし群	3.68	1.25	3.63	1.14	.349	.513
	短期群	3.80	1.64	3.57	1.41		
	長期群	3.91	1.02	3.70	.98		
22.逐語訳(一語一語訳す)はしないよう心掛ける。	なし群	3.85	1.23	3.74	1.02	.572	.478
	短期群	4.00	1.22	3.50	1.14		
	長期群	3.86	0.89	4.06	.90		
23.読んだり聞いたりしたことを英語で要約する。	なし群	2.21	1.07	2.38	1.09	11.145***	.018
	短期群	3.00	1.58	2.83	1.07		
	長期群	3.05	1.21	3.13	1.05		
24.知らない語を理解しようと推測する。	なし群	4.15	0.78	4.05	.87	.122	.138
	短期群	4.40	0.89	3.86	1.04		
	長期群	3.82	1.05	4.26	.81		
25.英語での会話中、適切な語が思い浮かばないとき、ジェスチャーを使う。	なし群	3.68	1.36	4.24	.93	.445	.038
	短期群	4.40	0.55	3.78	1.31		
	長期群	4.14	0.89	4.07	1.06		
26.英語で適切な語が分からないとき、自分で新語を作る。	なし群	1.85	1.35	2.28	1.18	3.767*	.032
	短期群	3.20	2.05	2.39	1.23		
	長期群	2.36	1.40	2.61	1.29		
27.英語を読むとき、一語一語辞書で調べない。	なし群	3.50	1.26	3.52	1.16	4.994**	2.447
	短期群	3.00	1.58	3.61	1.16		
	長期群	3.82	1.22	4.25	.94		
28.他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと心掛ける。	なし群	2.50	1.16	2.97	1.17	5.278**	.056
	短期群	3.00	0.71	2.65	1.23		
	長期群	3.32	1.29	3.36	1.18		
29.英語の単語が思い浮かばないとき、同じ意味を持つ語や句を使う。	なし群	4.50	0.86	4.42	.78	.823	.383
	短期群	4.40	0.55	4.26	.75		
	長期群	4.05	1.25	4.56	.57		

30.いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける。	なし群	3.29	1.19	3.50	1.06	3.461*	.052
	短期群	4.40	0.55	3.74	.96		
	長期群	3.50	1.14	3.81	.94		
31.自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する。	なし群	4.12	1.04	4.17	.79	.033	.014
	短期群	4.20	1.30	4.09	1.12		
	長期群	4.05	0.79	4.17	.75		
32.他の人が英語を使っているときは、集中して聞く。	なし群	4.15	0.93	4.28	.83	.827	1.055
	短期群	4.20	0.84	4.13	.92		
	長期群	3.82	0.80	4.26	.84		
33.優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける。	なし群	4.09	0.87	4.05	.94	1.088	1.210
	短期群	4.60	0.55	3.87	.97		
	長期群	3.82	1.01	3.98	.95		
34.スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる。	なし群	3.52	1.12	3.51	1.02	5.335**	.767
	短期群	3.20	1.64	3.48	.99		
	長期群	2.82	1.10	3.09	1.11		
35.英語で話しかけることのできる人を探すよう心掛ける。	なし群	2.97	1.42	3.23	1.10	8.291***	.225
	短期群	4.80	0.45	3.83	1.15		
	長期群	3.27	1.35	3.66	1.14		
36.できるだけ英語で読む機会を探す。	なし群	3.73	1.10	3.68	.96	3.260*	1.744
	短期群	4.80	0.45	3.83	1.11		
	長期群	3.50	1.06	3.75	.92		
37.英語の技能を高めるための明確な目標を持つている。	なし群	3.94	1.12	3.75	1.06	.016	.022
	短期群	4.00	1.00	3.78	1.09		
	長期群	3.68	0.99	4.00	.92		
38.自分の英語学習の進歩について考える。	なし群	4.00	1.09	4.00	.82	1.795	.401
	短期群	4.00	1.00	3.87	.97		
	長期群	3.50	1.14	3.96	.78		
39.英語を使うのに自信がないときは、いつもリラックスするよう心掛ける。	なし群	2.70	0.98	3.12	1.07	1.388	.065
	短期群	3.60	1.52	3.13	1.14		
	長期群	3.09	1.19	2.98	1.01		
40.間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける。	なし群	3.21	1.17	3.29	1.11	3.500*	.073
	短期群	4.20	0.84	3.35	1.30		
	長期群	3.36	1.22	3.96	1.00		
41.うまくいったとき、自分をほめる。	なし群	3.33	1.34	3.42	1.15	1.389	3.202
	短期群	2.60	1.82	3.35	1.15		
	長期群	2.86	1.28	3.34	1.39		
42.英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく。	なし群	3.33	1.31	3.16	1.24	5.092**	.018
	短期群	2.80	1.48	3.00	1.38		
	長期群	2.55	1.50	2.82	1.35		
43.英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらるか、もう一度言ってもらるかたのむ。	なし群	4.00	1.20	4.28	.81	1.153	1.018
	短期群	4.20	0.84	4.09	1.08		
	長期群	3.73	1.12	4.11	.91		
44.話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう。	なし群	2.61	1.22	3.08	1.19	4.133*	1.168
	短期群	3.40	1.14	3.35	1.27		
	長期群	3.18	1.22	3.53	1.23		
45.他の人と英語を使う練習をよくする。	なし群	1.97	1.13	2.36	1.12	12.105***	2.279
	短期群	3.80	1.10	2.70	1.40		
	長期群	3.09	1.41	2.77	1.09		
46.困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める。	なし群	2.33	1.36	2.86	1.31	8.035***	.072
	短期群	4.00	1.22	3.17	1.23		
	長期群	3.05	1.29	3.55	1.26		
47.英語で質問をよくする。	なし群	2.30	1.29	2.36	1.07	9.808***	1.507
	短期群	3.40	1.82	2.65	1.27		
	長期群	3.18	1.18	3.04	1.18		
48.英語話者の文化を学ぶよう心掛ける。	なし群	3.70	1.05	3.84	1.06	.249	.253
	短期群	4.00	1.22	3.78	1.00		
	長期群	3.50	1.14	3.89	1.05		
49.特定の日本人の英語の熟達者を意識している。	なし群	2.88	1.45	3.07	1.32	1.481	.120
	短期群	3.80	1.30	3.35	1.50		
	長期群	2.86	1.39	3.40	1.23		
50.自分の英語学習において、音読は重要だと思う。	なし群	4.36	1.08	4.57	.75	6.358**	.057
	短期群	5.00	0.00	4.48	.73		
	長期群	3.95	0.90	4.15	1.03		
51.辞書をよく引く。	なし群	3.70	1.24	3.95	1.00	3.750*	.089
	短期群	3.40	1.82	4.00	1.17		
	長期群	3.68	1.04	3.02	1.10		
52.自分で考えた英語ノートを活用する。	なし群	2.39	1.32	2.90	1.19	1.424	1.489
	短期群	2.80	1.48	3.35	1.34		
	長期群	2.59	1.30	2.42	1.15		
記憶ストラテジー	なし群	2.84	0.66	3.18	.51	1.905	.884
	短期群	3.22	0.84	3.17	.70		
	長期群	3.16	0.60	3.19	.66		
認知ストラテジー	なし群	3.31	0.61	3.38	.52	8.602***	1.105
	短期群	3.81	0.74	3.42	.64		
	長期群	3.71	0.61	3.69	.51		
補償ストラテジー	なし群	3.36	0.60	3.58	.61	3.183*	.257
	短期群	3.73	0.79	3.43	.76		
	長期群	3.58	0.68	3.85	.56		
メタ認知ストラテジー	なし群	3.75	0.75	3.80	.62	1.776	.012
	短期群	4.24	0.56	3.85	.75		
	長期群	3.55	0.82	3.86	.57		
情意ストラテジー	なし群	3.14	0.83	3.24	.64	.524	.423
	短期群	3.30	0.86	3.21	.77		
	長期群	2.97	0.81	3.23	.67		
社会ストラテジー	なし群	2.82	0.80	3.13	.79	7.505***	.000
	短期群	3.80	1.07	3.29	.72		
	長期群	3.29	0.86	3.48	.72		

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

付表 2. 海外生活期間と性別ごとの CAN-DO 得点

項目	群	男性		女性		期間の主 効果(F値)	性別の主 効果(F値)
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
53.興味・関心のある話題に関するまとまりのある話を理解することができる。(講演・講義など)	なし群	3.06	1.14	3.03	1.05	28.865***	.447
	短期群	3.60	0.89	3.35	1.15		
	長期群	4.32	0.89	4.21	.74		
54.テレビやラジオのニュース番組を聞いて、その要点を理解することができる。	なし群	2.97	1.21	2.94	1.04	21.384***	.485
	短期群	3.60	0.89	3.30	1.11		
	長期群	4.05	0.90	3.96	.78		
55.観光地や博物館などでガイドの説明を理解することができる。	なし群	3.15	1.23	3.17	1.12	20.644***	.001
	短期群	3.20	0.84	3.39	.99		
	長期群	4.32	0.72	4.09	.77		
56.公共の施設や学校などで、簡単な指示や説明を聞いて、理解することができる。	なし群	3.48	1.18	3.68	1.02	18.119***	.041
	短期群	4.20	0.84	3.74	.96		
	長期群	4.41	0.73	4.57	.57		
57.交通機関における指示や連絡事項を聞いて、理解することができる。	なし群	3.39	1.27	3.70	1.11	10.7234***	1.051
	短期群	4.20	0.84	3.26	1.10		
	長期群	4.32	0.78	4.32	.80		
58.自分の仕事や専門分野の内容であれば、電話で注文や問合せを聞いて、理解することができる。	なし群	2.67	1.19	2.69	1.17	22.145***	.646
	短期群	3.40	1.52	2.74	1.25		
	長期群	3.82	1.05	3.92	.85		
59.幅広い話題に関するまとまりのある話を理解することができる。(一般教養的な講演や講義など)	なし群	2.61	1.17	2.57	1.03	23.859***	.001
	短期群	2.80	1.48	3.00	1.17		
	長期群	3.82	0.91	3.68	1.01		
60.社会的な話題に関する話を理解することができる。(環境問題に関する講演など)	なし群	2.70	1.19	2.63	1.09	10.067***	1.263
	短期群	3.60	1.67	2.87	1.25		
	長期群	3.41	0.91	3.47	1.07		
61.会議に参加して、その内容を理解することができる。(イベントの打合せ、ミーティングなど)	なし群	2.48	1.18	2.42	1.14	18.021***	.007
	短期群	2.80	1.48	2.91	1.12		
	長期群	3.55	1.18	3.55	1.07		
62.テレビやラジオの政治・経済的なニュースを理解することができる。	なし群	2.52	1.12	2.42	1.05	16.661***	1.690
	短期群	3.20	1.30	2.61	1.16		
	長期群	3.50	0.96	3.38	.99		
63.いろいろな種類のドラマや映画の内容を理解することができる。	なし群	3.21	1.45	3.24	1.12	13.028***	.371
	短期群	3.20	1.30	3.43	1.12		
	長期群	4.05	0.95	4.17	.73		
64.調べたことについて、まとまりのある話をすることができる。(課題の発表、プレゼンテーション)	なし群	2.58	0.97	2.76	1.00	19.360***	.414
	短期群	3.40	1.14	3.00	1.09		
	長期群	3.73	0.94	3.57	.95		
65.自分の専門分野に関する講義や発表などを聞いて、それについて質問したり自分の考えを述べたりすることができる。	なし群	2.61	0.93	2.55	1.06	20.633***	4.396*
	短期群	3.60	0.89	2.70	1.18		
	長期群	3.77	1.07	3.47	.89		
66.商品やサービスについて、苦情を言うことができる。(商品の故障、サービスの内容など)	なし群	2.36	1.22	2.19	.97	22.410***	.838
	短期群	3.00	1.22	2.70	1.22		
	長期群	3.45	1.10	3.36	1.08		
67.公共の施設で簡単な用を足すことができる。(外国の郵便局で手紙を出す、図書館で本を借りるなど)	なし群	2.88	1.24	3.09	1.25	19.395***	.438
	短期群	3.40	1.14	3.35	1.37		
	長期群	4.00	1.02	4.30	.87		
68.病院などで健康状態を伝えることができる。	なし群	2.97	1.31	3.02	1.28	14.839***	.121
	短期群	3.40	1.14	3.26	1.01		
	長期群	4.10	0.94	3.94	.84		
69.簡単な内容であれば、電話で用を足すことができる。(歯医者や美容院の予約など)	なし群	2.94	1.30	3.06	1.29	19.456***	.000
	短期群	3.80	1.10	3.43	1.16		
	長期群	4.05	0.86	4.28	.74		
70.読んだ本や見た映画について、そのあらすじを述べるができる。	なし群	2.55	1.25	2.82	1.08	20.893***	.325
	短期群	3.20	1.30	3.04	.98		
	長期群	3.67	1.11	3.91	.86		
71.社会的な話題や時事問題について、質問したり自分の考えを述べたりすることができる。	なし群	2.27	1.15	2.40	1.06	20.945***	3.933*
	短期群	3.60	1.14	2.83	1.03		
	長期群	3.67	0.97	3.09	.97		
72.会議に参加してやりとりをすることができる。(イベントの打合せ、ミーティングなど)	なし群	2.27	0.98	2.30	1.09	23.091***	1.316
	短期群	2.80	1.48	2.48	1.16		
	長期群	3.71	1.27	3.26	1.04		
73.幅広い内容について、電話で交渉することができる。(予定の変更、値段の交渉など)	なし群	2.21	1.22	2.26	1.21	18.444***	.050
	短期群	2.20	0.84	2.65	1.37		
	長期群	3.57	1.21	3.23	1.08		
74.相手や状況に応じて、丁寧な表現やくだけた表現を使い分けることができる。	なし群	2.58	1.25	2.49	1.21	19.376***	.068
	短期群	2.60	1.52	2.65	1.37		
	長期群	3.81	1.08	3.66	1.18		
75.英文の種類や読む目的に応じて、適切に読みこなすことができる。(新聞をさっと読む、評論文を注意深く読む、小説を楽しみながら読む)	なし群	3.39	1.22	3.06	.97	1.299	.453
	短期群	3.40	1.52	3.22	1.00		
	長期群	3.43	0.98	3.55	.93		
76.英字新聞で社会的な出来事に関する記事を理解することができる。(The Japan Times/The Daily Yomiuri/The New York Timesなど)	なし群	3.18	1.29	2.79	1.00	4.168*	.567
	短期群	3.20	1.10	3.13	1.10		
	長期群	3.48	1.21	3.47	.89		
77.まとまった量の英文の要点を理解することができる。(講義や研修での課題図書や資料など)	なし群	3.18	1.16	2.82	.94	6.049**	1.154
	短期群	3.20	1.10	3.17	1.07		
	長期群	3.67	0.80	3.43	.97		
78.仕事に関する手紙(メール)を理解することができる。	なし群	3.12	1.32	2.98	1.02	11.512***	.507
	短期群	3.40	1.14	3.30	.97		
	長期群	3.95	0.86	3.75	.96		
79.商品の取り扱い説明書を理解することができる。(電化製品など)	なし群	3.21	1.32	3.20	1.14	5.899**	3.907
	短期群	3.80	1.10	2.91	1.16		
	長期群	4.00	0.63	3.62	.92		
80.雑誌の社会的、経済的、文化的な記事を理解することができる。(TIME/Newsweekなど)	なし群	3.09	1.26	2.86	.97	6.486**	1.287
	短期群	3.80	1.10	3.26	1.10		
	長期群	3.48	0.98	3.57	.91		
81.文学作品を理解することができる。(小説など)	なし群	3.18	1.26	2.99	.97	4.596*	.232
	短期群	3.80	1.10	3.30	1.06		
	長期群	3.33	0.86	3.74	.88		

82. 資料や年鑑などを読んで、必要な情報を得ることができる。(報告書、統計的な資料など)	なし群	2.97	1.21	2.76	.95	7.758***	.107
	短期群	2.80	1.48	2.83	1.03		
	長期群	3.48	0.98	3.47	.91		
83. 留学や海外滞在などの手続きに必要な書類を理解することができる。	なし群	2.88	1.34	2.73	1.09	11.516***	.040
	短期群	3.40	0.89	3.48	1.24		
	長期群	3.67	1.06	3.60	.95		
84. 興味・関心のあることについて、説明する文章を書くことができる。(簡単なレシピ、器具の使い方など)	なし群	3.13	1.21	3.34	1.01	9.080***	.219
	短期群	3.60	0.89	3.61	1.03		
	長期群	3.90	1.00	3.96	.92		
85. 興味・関心のある話題について、聞いたり読んだりした内容の要約を書くことができる。(講義の内容、雑誌や新聞の記事など)	なし群	3.00	1.06	3.02	1.02	12.877***	.000
	短期群	3.40	0.89	3.52	1.04		
	長期群	3.90	1.00	3.77	.96		
86. 日常生活の身近な話題について、自分の考えや意見を書くことができる。	なし群	3.09	1.18	3.55	.96	11.066***	1.182
	短期群	3.60	1.14	3.65	.93		
	長期群	4.00	0.77	4.10	.82		
87. 日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる。(食べ物、祝日、お祭りなど)	なし群	3.00	1.25	3.52	.91	8.836***	2.421
	短期群	3.80	1.30	3.61	.84		
	長期群	3.62	0.86	4.15	.85		
88. 自分がやりたいと思っていることの説明や理由を書くことができる。(留学の志望動機など)	なし群	3.09	1.18	3.54	1.01	10.148***	1.540
	短期群	4.00	0.71	4.04	.77		
	長期群	3.85	0.88	4.06	.75		
89. 自分の専門分野の内容であれば、注文や問合せに対して簡単な返事を書くことができる。	なし群	3.09	1.16	2.99	1.04	7.613***	.003
	短期群	3.40	0.89	3.26	1.14		
	長期群	3.55	1.00	3.83	.83		
90. 社会的な話題について自分の意見をまとまりのある文章で書くことができる。(環境問題など)	なし群	2.76	1.15	2.86	.98	4.781**	.009
	短期群	3.20	0.84	3.04	.93		
	長期群	3.24	1.04	3.35	.88		
91. 自分の行なった調査について、まとまりのある文章を書くことができる。(レポート、報告書など)	なし群	2.67	1.11	2.86	1.01	8.237***	.376
	短期群	3.60	1.14	3.00	1.09		
	長期群	3.38	0.92	3.42	1.00		
92. 商品やサービスについて、苦情を申し立てる文章を書くことができる。(商品の故障、サービス内容など)	なし群	2.61	1.20	2.49	.96	8.390***	4.556
	短期群	3.40	1.14	2.43	.90		
	長期群	3.29	1.15	3.12	.92		
93. 社会的な話題に関する雑誌記事や新聞記事の要約を書くことができる。(社説や論文など)	なし群	2.67	1.08	2.55	.99	3.419*	.919
	短期群	3.00	0.71	2.65	.93		
	長期群	3.10	1.22	2.98	1.00		
94. 講義や会議の要点のメモをとることができる。	なし群	2.88	1.14	2.86	1.07	7.429**	.898
	短期群	3.60	1.34	2.91	.95		
	長期群	3.47	0.96	3.59	.96		
Listening 準1級	なし群	3.12	0.99	3.20	.86	31.046***	.528
	短期群	3.70	0.78	3.30	.88		
	長期群	4.20	0.75	4.18	.58		
Listening 1級	なし群	2.70	1.05	2.66	.94	21.269***	.150
	短期群	3.12	1.29	2.97	1.07		
	長期群	3.66	0.80	3.65	.82		
Listening Total	なし群	2.93	0.98	2.95	.85	28.780***	.346
	短期群	3.44	0.97	3.15	.94		
	長期群	3.96	0.71	3.94	.65		
Speaking 準1級	なし群	2.70	0.98	2.78	.91	29.483***	.176
	短期群	3.40	1.06	3.07	.96		
	長期群	3.81	0.87	3.83	.66		
Speaking 1級	なし群	2.33	1.00	2.36	1.02	25.156***	.692
	短期群	2.80	1.11	2.65	1.13		
	長期群	3.69	1.00	3.31	.93		
Speaking Total	なし群	2.56	0.93	2.63	.92	29.895***	.342
	短期群	3.18	1.05	2.92	.99		
	長期群	3.75	0.90	3.64	.71		
Reading 準1級	なし群	3.22	1.02	2.97	.80	8.287***	1.728
	短期群	3.40	1.05	3.15	.89		
	長期群	3.70	0.72	3.57	.75		
Reading 1級	なし群	3.03	1.12	2.84	.83	9.860***	.396
	短期群	3.45	0.91	3.22	.94		
	長期群	3.49	0.81	3.59	.75		
Reading Total	なし群	3.13	1.02	2.91	.76	9.951***	1.124
	短期群	3.42	0.98	3.18	.85		
	長期群	3.61	0.71	3.58	.72		
Writing 準1級	なし群	3.07	0.99	3.32	.85	14.514***	.659
	短期群	3.63	0.78	3.62	.75		
	長期群	3.83	0.72	3.98	.70		
Writing 1級	なし群	2.72	0.92	2.72	.86	8.662***	1.174
	短期群	3.36	0.91	2.81	.81		
	長期群	3.29	0.88	3.29	.83		
Writing Total	なし群	2.91	0.88	3.05	.81	13.243***	.001
	短期群	3.51	0.81	3.25	.74		
	長期群	3.57	0.67	3.67	.70		

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001